物流タウンに変貌へ

常磐道・流山ＩＣ付近

巨大施設の建設進む

流山市の常磐自動車道・流山インターチェンジ（ＩＣ）近くで、巨大な物流施設の建設が進んでいる。敷地面積は約130㌶で東京ドーム27個分。3年後には、住宅地が隣接する場所に十数棟の施設がすべて建ち並ぶといい、一帯は巨大倉庫が集積する一大物流タウンに変貌する。

用地はもともとは水田や畑だった。2000年代の中ごろ、最初の物流施設が着工されると、利便性の良さから次々と巨大施設の建設が始まった。

流山ＩＣから野田市方面へ向かう県道沿いでは、約1・5㌔にわたって、最大約150㍍の長さがあるクレーンのアームが天高くそびえ立つ。その数は二十数本。コロナ禍でも好調な物流業界を象徴するような光景だ。

エリアの北側一帯を整備する大和ハウス工業（本社・大阪市）は約30㌶の用地で、計4棟の大型物流施設「ＤＰＬ流山」の建設を計画。2棟がすでに完成しており、現在は21年11月に稼働を目指す「ＤＰＬ流山Ⅳ」が建設中で、作業員約700人が働いている。

建物は5階建てで、延べ床面積は約32万平方㍍を予定。広大なフロアを利用できるのがメリットで物流施設としては国内最大級という。現場では、1本20㌧を超す柱や梁をつるし、360度回転して運ぶクレーンが欠かせない。しかし、幅410㍍、奥行き約250㍍もある建物の中央部まで届かないのがネックだった。そこで、運転席をはさんでアームの反対側に350㌧もの重りを設置してバランスを取り、アームの稼働範囲を半径約80㍍から約130㍍に広げることに成功。建物の外側からでも作業ができるようになった。

同社の黒野聡工事部次長は「建設現場は安全と品質が第一」とした上で、「倉庫の顔はなんと言っても床なんです。その精度をプラスマイナス3㍉以内で平らに仕上げることを目指したい」と強調する。

【橋本利昭】

（上）巨大なクレーンのアームが林立する工事現場（下）クレーンのバランスを取るために積み重ねられた重り。1個12・5㌧で計28個ある＝いずれも流山市で